

がん患者さんに聞いてみたいこと

※回答につきましては、私個人の考えであり、がん患者さんがみな同じではないことをご承知おきください。

- がんと知ってから、どのようにして前向きになっていったか

前向きになれたのは、子どもたちの成長を見届けなくてはと思ったから。

私がやりたいことを主治医ができる限り協力してくれたから。

- 一番つらいことは。それを解消するにはどうしたら良いか

罹患したばかりのころ、根拠のない噂話が辛かった。

私の場合は、友人がフォローしてくれていたおかげで辛さは半減した。

- 心の支えは何ですか

子どもたちの存在と信頼できる医療者、友人、同じ病気をした仲間。

- 精神的につらいことは何ですか。どのようにして立ち直りますか

(一例)

罹患時：根拠のない噂話をされたことは辛かったが、友人が支えになってくれた。

「肺がんのステージⅣで余命2年らしいよ」→「治療はしているけど元気に過ごしているよ」

- がんにかかって死を身近に感じた時、新しく持つようになった考えは（心情の変化）

一日一日を大切に精一杯生きようと思った

- 医師の対応で悲しく感じたこと

事務的な対応をされたこと

- 医師に治療以外で行ってほしいことは

病気だけに向き合うのではなく、人として向き合ってもらいたい（向き合ってもらっている）

- がんと診断されたとき始めにすべきこと

自分の病気のことを知る。

- がんと診断されてから医師の対応で救われたり前向きになった事

「現状維持でよしとしよう」

「わがまま言っていていいよ」とやりたいことをできる限りやらせてもらっていること

- 家族や友人にどういう態度や対応を求めているか

普段通りにしていてくれたらよい

子どもたちには自分のことは自分でやってもらうようにした。

- 家族や友人にどういう方法で伝えたのか

ありのままはっきり伝えた。

- 告知をされた方がよいか

告知を受けたときは子どもたちが小学生～高校生だったので言ってもらってよかったと思う。

子どもたちも自分も心の準備ができると思うから

- がんになったことで、ご家族との関係に変化はあったか

子どもたちなりにいろいろ考えてくれるようになったり、絆が強くなった気がする。

- 担当医との信頼関係が築き始めたのは治療を始めてからどのくらい経た後で、きっかけは

その先生によって違いますが、病気だけに向き合うのではなく人として向き合ってくれていると思えた時

- 闘病生活の中でも楽しみにしていることはあるか

子どもたちの成長を見届けること。また、今は家族で旅行を楽しんだり、闘病仲間とお出かけしたりすること。

- がんの告知をされてから前に進もうと思ったきっかけは

子どもたちをこのまま残していくわけにはいかないと思った

- がんになった時医師にしてもらいたいこと。干渉してほしくないこと

一緒に向き合ってほしい。疾患だけに向き合うのではなく、患者の背景、環境も知っ
たうえで診てもらいたい。

- 治療法を選ぶ際に最も大事にしたこと

QOL ができるべく下がらないように選びたい

- 残された時間で何をしたいか

家族との時間、友だちとの時間、仲間との時間を大切に過ごしたい。

- 家族や医師にどのように接してほしいか

普段通りに接してほしい

- 自分にとって大切な人に会いますか。愛についてどう思いますか

会います。いろいろな形の愛情があると思います。

- 抗癌剤を自分で探すとき海外と日本とのドラッグラグはあるか。

国内未承認でも使いたいのか

自分で探したことはありませんが、ドラッグラグはあると思います。

国内未承認の薬は今のところ使うつもりはありません。

- がんと告知されたときの心境

（喫煙者だったので）あ～やっぱりな～。もう少しでこの世からいなくなれる。

だけど、子どもたちのことが心配。

- もし治るなら成功率の低くリスクの大きい治療法でもうけるか

信頼できる医師と相談してから決めると思います。

がん診療に携わる医師に聞いてみたいこと

・ご自身で新薬の治験を行ったことはあるか。PMDA とのやり取りで困ったことはあるか

・従来の方法から最新技術にスイッチするタイミング、きっかけ

・ステージが高い患者さんに抗癌剤を投与すべきか問われたらどう判断するか

・助かる見込みのない患者を担当するとき、その患者の治療に対するモチベーションをどう維持するのか

⇒ 〈品川医師からの回答〉 根治（完全に治る）の見込みが極めて厳しいことは、明確にお伝えします。その上で、少しでも元気に過ごせる時間を延ばしていくためにどうしたらよいか考えましようとお話します。結果として抗がん剤治療をお勧めしない場合もありますが、それでも目標は同じであることを伝え励まします。

・患者との距離感は、どのくらいが適切か

・がん研究とがん診療の両方は大変なのでしょうか

・ガンに特化して専門性を持ちたい場合に、どのようなキャリアパスが存在するのか

・末期の患者さんに直面した時つらいか。どのように乗り越えるか

・がん患者を救えなかったとき、どう気持ちの整理をつけるか

・相手の気持ちに寄り添う話術

・自身の精神的なつらさを、どうケアしているのか

・自分の患者さんが亡くなったら私生活に、どのような影響が出るのか

・がん宣告の時に患者が精神的に耐えられそうにないときはどうするか

⇒〈品川医師からの回答〉明らかに耐えられないと思われる精神疾患などがある場合には、精神科医師の判断を仰ぐ必要がありますが、それでも病名を告げないというのはかなり稀です。お話の仕方（話す内容、家族のサポートなど）を工夫すれば、それで問題になったという経験はありません。

・がん告知の時、気を付けていること

・他の医師と比べて良い点、悪い点

・なぜ、がん診療に携わろうと思ったのか

・病自体の回復に加え精神面や家族のサポートも必要となるが、どの程度までふみこんでいるか

・患者が泣きわめいたり、どうしようもないワガママを言ったらどうするか

・完治することはないと分かっているとき、どういう思いで治療を進めているのか

・がん診療で一番難しいと感じること

⇒〈品川医師からの回答〉命に関わる病気になった患者さんが、そのことを受け入れるには時間がかかるものですが、肺がんは時に極めて進行が早く、気持ちが追いつく前にいろいろと決断を迫らねばならないことがあります。十分に悩ませてあげられる時間が無いときに、難しいなと感じます。

- ・ 終末期医療に関する制度について
- ・ 患者の意志なら助かる可能性があっても延命はしないか
- ・ 精神的にも病んでいる患者さんと、どのようにコミュニケーションをとるのか
- ・ 患者さんに治らないがんであると言うにはどうしているのか
- ・ がんは研究を続けたら簡単に完治できるようになるか
- ・ 自分の家族には絶対にしたくないが、他人である患者だからこそできた治療はあるか
- ・ 患者に病状をすべては伝えず部分的に隠すことはあるか
- ・ 今までに後悔した患者に対する言動はあるか
- ・ 患者が亡くなる以外に治療中に無力感を覚えるのは、どの様なときか
- ・ 現在の、がん治療に不足していると感じる点
- ・ がんを見逃してしまい重症化してしまったこと
- ・ 治療をあきらめかけている患者に、どのような対応をするか

本日の授業の感想

- ・今後ますますがん患者が増加していくと予想されるが早期発見の重要性が世間に認知され手遅れに近い状態となる患者が一人でも減ればよいと思った
- ・現役医師と患者の目線から貴重な話を聞いて良かった
- ・患者への向き合い方が患者にどう伝わっているのか知る良い機会だった
- ・今日の話をつまえて将来の自分の医師像を考えていきたい
- ・今日話を聞かなければ私も「残念ながら」と言ってしまうそうだし、「現状維持でよいしとしよう」に対して「何がいいんだ」と怒りを感じていると言われても納得してしまう。患者の感じ方、性格を見極めてその人にあった言葉を選ぶ力は今の私には無い。もしかしたら、患者が自分に合う医師を探すのが一番早いのもかもしれない
- ・ゆっくりやわらかに話した方がいいと学んだ
- ・がん闘病が、これほどまでに長い闘いだということを実体験として聞くことで自分のものとして想像することができた
- ・抗癌剤が合うかは人によって異なるということも印象に残った
- ・医者への何気ない一言や心遣いが患者さんの気持ち感情に大きな影響を与えているということが胸に刺さりました
- ・言葉一つで患者が安心すること。心遣いがいかに大切かわかった

・患者が何気ない会話の中で意外な言葉を気にしてたり、安心したりしていた。それががんにかかった人と、そうでない人の違いだと思った。その違いをできる限り小さくすることが大事と思った

・今回講演をして下さった 2 人の医師の方はとてもフレンドリーで親しみやすい方でした。がんの様な深刻な病気を抱える患者にとってこの様な医師の方が必要とされているのだと思います

・患者一人一人性格が違う中で、相手の気持ちを知ろうとすることが大切と感じた
・やはり患者は医師に人間性を求めるのだと思った。技術を磨くのはもちろんだがお互い人として関わる事を第一に考えたい

・言い方、話す速さで患者のとらえ方変わるので配慮を大切にしたい

・将来、医師の立場になっても患者とのコミュニケーションを大事にしようと思った

・今まで自分の中にあった医師像、がんの治療の仕方等が一新できた

・実際の患者の話を知ると違う視点からたくさんの物が見えてきた

医師として患者さんに対して心かけたいことは何ですか

・かつての高圧的な態度ではなく、患者と同じ位置にたち医者と患者間での情報伝達不

足やえごがないような医者になりたい

・患者と目線を合わせて向き合い信頼関係を築き上げる

・同じ目線に立つこと

・不愛想な感じにならず親身な関係を築くこと

・「聞ける」医師になりたい

・ゆっくり話すこと

・事務的に話しすぎないこと

・病名はきちんと伝える事

・自分が医師になった時、受け身の立場に立った言動、治療を心掛けたい

・臨床医としては信頼関係を構築する事が重要

・どの様な治療を受けたいか、何か些細な事でも気になることはないか意思疎通を図る

ためには信頼関係が重要

・話す時説明するとき患者さんの顔、様子を見ながら話すこと

・何気ない一言が患者にとって不安となることもあるので気を付ける。言ってしまうと

も患者が聞けるような雰囲気を中心掛ける

・患者が何を考えているのか感じているのかを常に考えながら配慮する

- ・冷静な視点と患者の心に寄り添う視点のバランス

- ・不安を与えず事実を伝える

- ・患者の立場に立って物事を考え、接することを大事にしながら客観的な視点も見失わないようにする

- ・一人一人を見るという気持ち

- ・自分の入院、手術の経験から自分も患者と対話をして信頼関係を築き上げられるような医師になりたい

- ・患者は24時間365日患者でいるわけではなく家庭や職場でも立場を持っている。そ

- う言う病気以外の側面にも配慮できる医師になりたい

- ・しっかり一般的に使われている言葉で説明する

- ・家族も一緒に敬う

- ・患者を、かわいそうな人として扱わない

- ・患者が後悔ないような決断が出来るように過去の病歴や今後ありうる合併症などについて伝える

- ・自分の言葉に責任を持つ

- ・深い共感力と敬意を持って患者の人生に寄り添い、理解する